

ある分裂病患者の経過的観察

(幻覚を中心として)

昭和38年9月17日受付

信州大学医学部神経科
(主任:西丸四方教授)

三 沢 健

Verlaufsbild einer Schizophrenie
(Bezüglich der Halluzinationen)

Takeshi Misawa

Nervenklinik, Schinschu Universität, Matumoto
(Direktor: Prof. Dr. Schiho Nishimaru)

ある分裂病患者が、その異常体験をどの様に述べながら軽快していくか、を中心にして、入院中の経過を追跡される。

症 例

22才女、商家の一人娘で高校を中位の成績で卒業して、家事の手伝いをしていた。性格は短気我儘だが朗らかであると母は云う。既経歴には特筆すべきものはない。負因では、母方の叔父が分裂病で入院したことがある。

昭和36年9月15日から、37年1月11日迄当科に入院した。当時は硬い表情で、空笑があり、突然泣き出したりした。「政男さんが柴子、と呼ぶ。政男さんはアナウンサーです。高校時代松本駅で会ったことがある。政男さんは口唇にふれたり、ベニスを性器に入れることもある。その時男性の臭いを感じる。メロデーに混つて政男さんが話しかける。時にはバカヤローとも云う。電波の力で支配されている様だ。政男さんと話ができる。私の考えが向おに伝わる。考えが声になっても聞こえる」。など多彩な幻覚妄想体験や自我障害があつた。

今回は、第2回目入院で昭和37年6月27日から38年2月25日迄。入院時は食欲不振・不眠・頭重を訴え空笑があつた。「柴子と呼ぶ、声も同じだから昨年と同じ池田政男さんでしょう。「自分で考えると声になって聞えてきた」。「自分の考えが皆にとられてしまう、そして、それを皆が知っている様に思う。誰か知らないが、考えを吹き込むことがある」等の症状をもつて入院した。

入院後は「柴子と呼ぶ声が聞える。男の快い音声だが極めて不快です」という。そして次の実験がなされている。(6月29日) 予め柴子と呼ぶ幻聴があつたら、

挙手する様に指示しておき、10数秒間医師と眼を合わせて他の話をしている。幻聴のサインはない。患者もこの間聞えなかつたと云う。2~3秒後イイエありましたという。3回ともそうであつた。こゝでは時間の相違によつて構えが異つている。これについての考察は新海・宮坂によつてなされ発展している。一週間後上の実験を試みる。内容は云えないが、何となく聞えると云う。又、前程には聞えないとも云う。

テレビを見ていると、出演している人に考えが伝わり、その人が答えてくれる。声の中に政男さんも混じつている。

「自分の考えに解答するのは、誰の声ときまつてはいないで色々な人の声だ」。

「政男さんに会つたことがある。高校生の頃、松本駅で。それが僕だと去年伝えてきた」。

第1回入院時は、数年前高校時代松本駅で会つたことがあると云つていたが、今回は去年伝えてきたことによつて政男さんとわかっている。政男さんは素敵な人で、結婚したいと云い、入院してから楽しいという。

7月から8月にかけて、コントシンは300mgから400mgに増量している。この頃から「昨日から何も聞えなくなつた」。「少ししか聞えない」と云い「自分の考えが皆にわかつてしまう。どうしてか不思議だ。それに対して皆が何か云つている様な気がする」又「政男さんはいると思う」と云いながら、一方では「私は頭の病気だと思ふ」と云つている。又「盗人と判断されている。という馬鹿らしい考えが生じてしまう。考えさせられてしまう」。「不安にさせる人がいる」と云い落着きがない。「その人は政男さんで『僕がいじめているんだ』と聞える」。「やきもちを焼いて、そうしているのだからと思う」と云う。

「政男さんがどうして、途中で呼んだり呼ばなかつたりするのかわからない。思い当たるふしがない。自分が病気で聞えてくるとは思わない。早く解決したい」と泣き出す。3日後には「政男さんの声が聞えてきたのは病気だと思う。政男さんは実在しない。それについて聞かれるのは、どうしてか嫌だ」と一転している」10日後「池田さんは、どうしているか、わからない。いつも、どうして存在するか、わからない」と云い、いつもという表現を使っている。

8月下旬、「聞えない、政男さんはいないと思う。間違いだつた。病気だつた。よくなつてうれしい」と云い、数日後「放送局にいる様な気がする。前に云つてきたから。」「私のすることに、何か云われている様な気がする」と云っている。翌日は「ラジオで政男さんの声がすると、よいと思う。そう思うと聞えることが近頃あつた」更に「自分の考えが政男さんの声になる。」「周囲の人が悪口を云う様な気がする。政男さんが批評みたいなきことを云う」と悪化した。

9月に入つて「周囲の人が何か云つている様な気がする。顔みればわかる。顔みなくても思い出す。」「政男さんも批評する。政男さんと結婚したいとは思わない。嫌いだから。声が聞えとうれしい。聞えないと静かでよい。嫌いなのは悪口を云うからで、前は云わなかつた。昨日悪口を云つたが、実在しているとは思わない。」「はつきり政男さんの声というのではなくて、頭に入ってくる。浮んでくるから不思議だ。」「政男さんのことを思うと頭に入ってくる」更に「政男さんのいないことは、わかっている。そんなバカなことはないが、そうなるから不思議だ。そんな時は嫌な気がする。声がしない方がよい」当時表情は硬く、人形のような感じだつたが、分裂病の疑いの男子患者と仲がよいといわれていたし、本など借りて読んでおり、その所有主が誰なのか問うても答えたがらず、話をそらしていた。「政男さんがいなくなつてうれしい、普通の自分に戻れたから」と云つた。政男さんは何か云うかと問えば「いゝえ、もうそういうことはなくなりました。政男さんのことを考えるのが、苦にならなくなつたと云つた。

10月に入り一寸無為になり、上述の体験もみられないのでコントミンを減量して、下旬にPZCに切替えた。すると「政男さんはいると思います。電波が頭にくる。電波で云つている。考えが政男さんに伝わり、話ができる。」「こんなことは困る。皆にあんなことを考えていると、いわれるから恥しい。」「上のことは入院以来ずっとあるが、云うのが嫌で、かくしていた。それが仲々止まらないので悲しくて泣いていた。人に

あんなことを考えていると、いわれるのとホームシックによる」と泣いている。更に電波に関しては「普通私の考えられないことが、浮んでくる時は電波だと思ふ。自分の考えが伝わってしまったたり、政男さんの考えもわかつたり、そういうことから電波だと思ふ」2日後「考えが人に伝わることは、なくなつた」とニコニコ答える。「政男さんが電波で云つてくることもなくなつた。入院以来ずっと電波があつたなどは嘘だ。一昨日は本当だと思つた。どうして、あんなことを云つたかと思ふ」と批判的である。

11月に入り表情も豊になり、全体に活潑になつてきた。政男さんは実在しないと云う。下旬になり再び関係念慮が現われて「政男さんにも伝わる様な、伝わらない様な、うまく云えない。頭の中に今考えたことが伝わってしまったかなあと浮んでくるみたい」と云い翌日は「政男さんにも皆にも考えていることが伝わるが、上手に云えない。政男さんと話ができる。こちらで思うことが向うに伝わり、向うのことが頭に浮ぶ、聞えるのではない。しかし、政男さんの気持とか、どういう考えなのかは、わからない。政男さんの云うことがわかるだけ。それは政男さんの考えといふか自分の考えである様に思う。そういう、つまらないことを考えるから病的だと思ふ。

12月には「聞えてくるというのでしょうか、わかるのだから聞えてくるのでしょうか、喋るのと違う。」「うんとくだらないことを考えて、それが周りの人に伝わつて多分悪口を云つていると思ふ。」「性交するといふ様な恥しいことで、自分でも考えては困ると思ふけれども、考えてしまう、それが伝わつてしまう」又伝わることに對して「以前表の道を通つた時、人がニヤニヤしていたから、松本の人にもわかる」と云う。

1月に入り考えが周囲の人に伝わるかとの間に「伝わらなくなつた。」「(少しはどうか)「少しはある」(政男さんは何か云うか)「云わない」(少しは云うか)「少しある、聞えるのでなくて浮ぶ」。

顔も円くなり肥えてきた。「早くよくなりたいたい一寸したことを苦にする病気だと思ふ」と云う。

2月に入り(以前政男さんはいたか)「そういう風に思つちやつたからだと思ふ」(実存しなかつたか)「えゝ」(どうしていると思つた)「聞えてきたりしたから、今は絶対にない。考えていることが伝わらない」(前は、わかつたというが)「どうしてもそう思えた。

退院時(政男さんの声)「近頃は聞えない」(あの頃は何か聞えた)「わかりません」(政男さんが云つたのか)「いゝえ、私の方が病気だつたので」(政男

さんを知っているか)「いゝえ」(実在するか)「いゝえ」(政男さんと会ったことは)「会ったことは、ないと思うが、会ったかなとも思ってしまう。考えるとはフツとそんな風に思ってしまう」と云っている。

考 察

「自分の考えが皆にわかってしまうから不思議だ。それに対して皆が何か云っている様な気がする」。「盗人と判断されている。というバカらしい考えが生じてしまう。考えさせられてしまう」。「性交するという様な恥しいことで、考えては困ると思うけれども、考えてしまい、それが伝わって悪口を云っていると思う」と、思考伝播・関係念慮・させられ体験・強迫思考の形のもの結びついている。特に後者では、伝わるから悪口を云われると説明している。又「周囲の人が何か云っている様な気がする。顔を見ればわかる」と妄想知覚様の説明しているところもある。何れにしても病状が悪化したり、軽快に向う時、前ぶれの様に関係念慮が現われている。

政男さんの声が聞えるが、病気で聞えてくるとは思わないと云ってから3日後「政男さんの声が聞えてきたのは病気だと思う」と云っている。1ヶ月後「政男さんはいないと思う。間違いだった。病気だった」と云い、数日後には居る様な気がすると云っている。更に1ヶ月後「政男さんはいると思う。電波で云ってくる。このことは入院以来ずっとあつたが、云うのが嫌でかくしていた」と云った。その後「政男さんが電波で云ってくることは、なくなつた。入院以来ずっと電波があつたなどは嘘だ。一昨日は本当だと思つた。どうして、あんなことを云つたかと思う」と云っている。又、入院当時、聞えたら拳手する実験を幾度か行っているが、そこでは実験の短い時間の間に、ずっと発言が変つて、今迄聞えなかつたといふながら、実は聞えたと云っている。こゝでみられるのは、短い時間

或いは数日、或いは数十日後に患者の述べる所が全く変つていることである。間違いだつた。病気だつた。かくしていた。嘘だと否定している。この変転が8回にわたつている。これは患者のその都度変る過去への見方、構えの相違と考えられるが、これは何に由来するものか。

幻聴が、だんだん形を変えていくが、12月に「聞えてくるというのでしょうか。わかるのだから聞えてくるというのでしょうか」と云い、(政男さんは何か云うか)「云わない」(少しは云うか)「少しある。聞えるのでなくて浮ぶ」と云う。自分の考えの様でもあると云う。まことに興味ある供述がなされている。

政男さんの声が出て、うれしいと云つてから、少し経て声がない方がよいと云っている。この頃、現実の生活で恋人らしきものができている。政男さんは何も云わなくなつた。政男さんのことを考えても苦にならないと云っている。政男さんが、いなくなつて、うれしいと云う。現実生活と幻聴の消失と一致しているのは面白い。

上述の如く、異常体験について幾度か否定するが、異常体験についてだけでなく、前言をひる返す所が随所にみられる。

「少ししか聞えない」。「少し聞えた」と「少し」という表現を量的な表現をよく使うが、これは日常よく感ずる所である。

結 論

- 1) この患者には幻聴に前駆して関係念慮が出現した。
- 2) 幻聴に対する態度が、時期により全く異り、その際には屢々殆んど全面的な食言が行われた。
- 3) 幻聴の推移・変化は真性幻覚から偽幻覚に至るだけでなく、更に幅広い範囲に及んだ。